
平和

石橋綾詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和

【Nコード】

N8204Y

【作者名】

石橋綾詩

【あらすじ】

魔王が目覚め、平和な世界で魔物が暴れはじめる。その中、待ちに待った勇者が現れるが…。

プロローグ・目覚め

・目覚め・

「キヤー！」と、逃げ惑う人々の悲鳴や、「助けて」という、人々の叫び声が聞こえる。化け物は黒く、2メートル以上もある熊のようなものや、犬のようなもの、1メートルほどもあるコウモリのようなものなどがいた。その中「みんな教会に逃げるんだ！早く！！」と若い男の声が聞こえる。人々はそれを聞くと、村に一つしかない、小さな教会へと逃げはじめた。

最後の一人なのだろうか。その人の中に入れると扉は閉められた。ここには怪我をしている人、泣いている人、子供を連れている人、様々な人がいた。

「あの化け物はいったい何なの？」

「あいつらは魔物だ」

「魔物？」「そうだ。魔物が現れたということは…やつが目覚めたのか！？」

「やつとは？」

「昔、勇者によつて、封印された魔王、サタナエル…」

「そんな！私たちはこれからどうすれば…」

「神に祈るしかないだろう…。そして、再び勇者が現れるのを待つしかない」

「…神よ」

教会にいた人々が皆、神を模した像に向かって、祈りはじめた。

夢の世界へ

彼女はこたつで大きなあくびをしながら「暇だなー」と一言。

今は冬休みなのだが、友達との約束もなく、課題も終わってしまい、暇なようだ。

「眠くなってきたかも」

と言い、そのまま彼女は眠ってしまった。

同じとき

彼は自分の部屋、といっても家具もなにもない場所にいた。

「なんで俺までそっちに行かなきゃいけないんだよ」

「だって、お父さん一人じゃ心配じゃない」

「なら、母さんだけ付いていけばいいだろ」

「あんた一人じゃよけい心配よ」「もう18なんだから一人でも平気だって」

「駄目です！ほら、行くわよ」

彼は、この部屋から嫌々ながらも出ていった。

彼女は、古びたベッドの上で目覚めた。彼女は起き上がり周りを見回した。そこには、四角い窓が一つ、白いカーテンは開けられ、外から暖かい日差しが入ってきている。他には、丸いテーブル、それに合わせた丸い椅子が四つある。その一つに男が一人、座っていた。

「あの…」

彼女は恐る恐る、男に声をかけた。

男は振り返った。

「おお！起きたか」

男は黒く短い髪をしていて、瞳は蒼く、肌は白い。彼女がいた国では、あまり見かけない風貌をしていた。

「はい…」

「俺はステーキ。この村の長をしている。早速で悪いが…。君は神に選ばれし勇者なんだ」

「えっ!？」

「もちろん一人ではない。もう一人いる」

「もう一人は？」

「まだ目覚めていない」

「そうですか…」

「それで、君にまずやってもらいたいことがあるのだが、付いてきてくれるか？」

「はい」

ステーキは、立ち上がり、予め用意していた、自分のものなのだろう、彼女には大きめのサンダルを手渡した。

「それを履いてくれ」

「はい」

彼女はベッドから降り、そのサンダルを履いた。やはり大きかったようだ。ステーキは、履いたのを確認すると、ドアの方へ歩き始めた。彼女は小走りでステーキの後を付いていった。

外に出ると、とても暖かく、蝶が目の前を通りすぎていく。足下を見ていると、花が咲いている。

「今は春ですか？」

彼女は、ステーキの後ろを歩きながら聞いた。

「そうだが、今だけじゃなく、ずっとこの気候なんだ」

「ずっと春なんて良いなあ…」

「君ところは違うのか？」

「私のところは、一年を通して、春夏秋冬あります」

「やはり夏は暑くて、冬は寒いのか？」

「はい。この世界はどこも、春なんですか？」

「いや。四つ大陸があり、それぞれ季節が違うんだ。東にある大陸が春。西にある大陸が秋。南にある大陸が夏。北にある大陸が冬だ」

「それじゃ、ここは東にある大陸なんですねっ」

「そうだ。おっ！着いたぞ」

「…教会ですか？」

「そうだ。中に入るぞ」

「はい」

ステークが教会の扉を開いた。

教会の中は、長椅子がきれいに並べられていて、真ん中に通路ができていた。その先には、白い女の形をした像が見える。この世界の神なのだろう。像の前までステークと、その後に付いて歩く彼女は来て、立ち止まった。

「この像に触ってみろ」

「はい」

彼女はゆっくり手を伸ばし、女神像に軽く触れた。すると、突然輝きだし、彼女は驚いて手を離れた。すると、輝きは消えてしまった。

「おお！君には魔力があるようだ」

「どうして解るんですか！？」

「この女神像は、魔力のある者が触ると輝くんだ」

「そうなんですか。急に光るからビックリした…」

「よし！広場に行つて練習するぞ」

「は、はい！！」

そう言つて、ステークたちは教会を出て、先ほど通つた広場に向かった。

広場に着くと、

「まず、その属性の神と契約しなければならない。まずは、風だ」

「何ですか？」

「自然界に多くある物は、少しの魔力で魔法が使える。だから、初心者には丁度いいんだ」

「そうだったんですか」

ステーキは頷いた。

「それじゃ、いくぞ」

「はい！」

「風を司る神クレイオスよ、この者に力を貸したまえ…」

すると、風が彼女を包みこんだ。だが、暫くすると何処かに消えてしまった。

「これで終わりだ。君は、クレイオスに認められた。試しに、あの木の枝を揺らしてみろ」

「どうやってですか？」

「命じればいいんだ」

彼女は静かに口を開いた。

「風を司る神クレイオスよ、風を操り、あの枝を揺らしたまえ…」

カサカサ…。枝が揺れた。

「で、できた！」

「あとは、これを見ながら自分でやれ。俺は、もう一人の様子を見に来る」

「はい！わかりました」

ステーキは、持っていた本を彼女に渡すと、来た道に戻って行った。

「おい！」

「ん…」

「起きたか!？」

彼は、ステーキによって起こされた。

「誰…」

彼は寝ぼけ眼でステーキを見つめる。

「俺はステーキだ」

「ステーキ？」

「まあ、まずは布団から出る」

「…はい」

彼は布団をどけると、起き上がった。

「ここは？」

「ここは、ドワン村、君のいた世界とは違う世界だ」

「違う世界！？」

「君は、この世界を救うために、神に選ばれた勇者なんだ」

「俺が…勇者！？」

「そうだ。それで、まず君にやってもらいたいことがあるんだが」

「何ですか？」

「ベッドの脇に置いてあるサンダルを履いて、俺について来てくれ」

「わかりました」

そう言くと、彼は言われた通りにサンダルを履き、ステーキの後を付いていった。

外に出て、少し歩いたところに、広場があり、そこには、女の子が一人いて、本と睨めっこしている。その横を通り、教会の前に着いた。ステーキは、扉を開けると中に入って行った。彼もその後について中に入った。そして、真ん中の通路を進み、女神像の前で止まった。

「この像に触ってみろ」

「はい」

彼は、なんのためらいもなく像に触った。

「変化なしか」

彼女のように像は輝かなかった。「何かあるんですか？」

「この像に、何の変化がなければ、魔力が無いということだ」

「そうなんですか…」

彼は残念そうだ。

「外に出るぞ」

「はい」

ステーキたちは、教会を出て、彼女の元へ向かった。

広場に着くと、ステーキは彼女に声をかけた。

「終わったか？」

「はい！全部できました！」

「全部！？そうか…」

彼女は不思議そうな顔をしている。

「なら、こいつと一緒に剣の練習でもするか？」

「はい！」

「じゃあ、ここで待ってる。今から道具を持ってくるから」

「わかりました」

そう言うとステーキは、一人で何処かに行ってしまった。

残された二人は顔を見合せた。彼女は微笑み、彼に話しかけた。

「私は、イノリ。よろしくね」

「俺は、トワ。こちらこそ、よろしく」

「貴方が、もう一人の勇者さん？」

「そうだけど…。勇者は二人いるの？」

「そうみたい」

「そうか。イノリって、呼んでもいい？」

「もちろん！私も、トワって呼んでいい？」

「うん」

話をしていると、ステーキが男を二人連れ、道具を持って戻って来た。

「これを使ってくれ」

二人は、木でできた剣を、一本ずつ渡された。

「この二人が稽古つけてくれる」「僕は、アル」

ステーキの右側にいる男だ。

「俺は、ミロクだ」

こちらは、左側の男だ。

「アルが女で、ミロクが男を相手してやれ」

「「よろしくお願いします」」

イノリとトワは、声を揃えて言うと、同時に頭を下げた。

「名前は？」

「私はイノリっています」

「俺はトワです」

「じゃ、イノリちゃんは、僕と一緒に向こう側でやるのか」
「はい」

「じゃ、俺たちはここでやるか」「はい」
こうして、稽古がはじまった。

「ハア、ハア…ハア」

稽古が始まって、一時間がたった。

「休憩しようか」

「はい」

イノリとアルは、稽古を中断し、その場に座った。

「休憩が終わったら、試しに二本でやってみたいんですけど、駄目ですか？」

「いいんじゃないかな。じゃ、もう一本持ってきてあげるよ」

「すみません！お願いします」

アルは、立ち上がり、剣を取りに走って行った。

イノリは、地面に膝を抱えて座り、トワの稽古風景を眺めていた。

「お前、なかなかやるな」

「ありがとうございます」

稽古を始めた時は、防戦一方だったトワも、今では、攻める余裕ができたようだ。

暫くすると、アルが今まで使っていた物よりも一回り小さい木の剣を二本持つて戻って来た。

「はい。これなら女の子でも、使いやすいと思うよ」

「ありがとうございます」

イノリは剣を受け取った。

「じゃ、始めようか」

「はい」

そうして、日が暮れた。

「今日はこれで終わりにしよう」ステーキの一言で四人の動きが止

まった。

「今日は明日に備えてゆつくり休め」

「明日なにかあるんですか？」

イノリがステークに問いかけた。「明日から、君たちは旅に出るんだ」

「もう！？」

イノリとトワは、とても驚いているようだ。

「そうだ。もう魔王は目覚めている。だが、まだ完全にはない。だから、完全に目覚める前に魔王を封印しなければならない」

「何処に居るんですか？」

「それは解らない」

「封印はどうやってするんですか？」

「それも解らない。だから、旅をしてそれを調べてくれ」

「何も解らないんですか！？」

「すまん……」

「そうですか……」

「しょうがないよ。今日はもう休もう？」

トワがその場の空気を明るくしようと声を張り上げた。

「そうだね！」

「アル、二人が使う部屋に案内してやれ」

「わかりました。じゃ、行こうか」

アルは二人の方に振り返った。

「はい！」

二人はアルに付いて行った。

広場を出て、直ぐの建物。

「二人の部屋はここと、隣だよ。お風呂とトイレは奥にあるから。それと、ご飯の時は呼びに来るから、それまでゆつくりしてよ」
部屋の中は、ベッドがあり、奥に扉があるだけのシンプルな部屋だった。

「「わかりました」」

二人が返事をする、アルは出ていった。

「私が、こっちの部屋でいい？」

「うん。じゃ、自分の部屋に行くね」

「うん」

二人は、部屋に入っていた。

その後、アルが呼びに来たが、二人は疲れてしまったのだろう。ぐっすり眠っていたので、アルはそのまま寝かすことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8204y/>

平和

2011年11月26日21時45分発行